(5) 正解は **don't**。before は確かに「…しないうちに」と和訳することもあるが，直訳は「…する前」である。「反事実的思考がこの悪しき螺旋を回ってずっと下の方へ進む前に」なら内容が理解できるが，「進まない前に」では意味を成さない。

4 (B)

(1) あなたも予想不可能だ。（2点）
(2) しばしば，彼らはあなたが意図した通りにはあなたが言うことを解釈してくれず，また，彼らが言っているとあなたが理解している通りのことを彼らは言っていないのだ。（8点）
(3) 他の人たちを人間らしい反応をしがちな人間として細心の注意を払って扱わないことは，交渉に悲惨な結果をもたらしかねないのである。（5点）

［出典］ Roger Fisher and William Ury *et al.*: *Getting to Yes*
（問題作成のためのやむを得ない事情から，省略・改変した箇所があります）

［全訳］

会社や国同士のやりとりでは忘れがちなのだが，交渉についての1つの基本的な事実は，交渉相手は「先方」の実体を伴わない代表ではなく，人間だということである。相手は感情，深く根を下ろした価値観，異なった背景と物の見方を持っており，予測しにくいものなのだが，それはお互い様である。

交渉のこうした人間的な側面は，役に立つ場合もあるし，悲惨な結果をもたらす場合もある。苦労して合意に達しようとする過程は，お互いが満足の行く結果に至ることに心理的に責任を持とうとする意識を生み出すかもしれないし，信頼，理解，尊敬，そして友情が時間をかけて築かれる仕事上の関係が，交渉の1つ1つの新しい段階をよりスムーズで，より効率的なものにしてくれるかもしれない。そして，気分がよい状態でいたいと願う気持ち，さらには他の人たちが自分についてどう思うかということについての関心ゆえに，他の交渉者の興味にもより敏感になることがしばしばある。

一方において，人は怒り，失望し，恐怖や敵意を抱き，挫折感を味わい，気分を害する場合もある。人が持つ自我はすぐに脅かされてしまうのだ。人は自分に有利な点から世界を見，自分が感じたものと現実を混同してしまうこともよくある。こちらが言いたいことを相手がこちらが意図したようには解釈してくれず，また相手が言っているとこちらが思っていることを相手は言っていない，ということもよくあるのである。誤解が偏見を強化し，それが，悪循環となる反応を生み出す行動につながる可能性があるのだ。考えられる解決策を理性的に探ることは不可能になり，交渉は失敗に終わってしまう。

他の人を，人間らしい反応を示しがちな人間として細心の注意を払って扱わないと，交渉に悲惨な結果をもたらすことにもなり得る。交渉中のどの時点で，他に何をしていようとも，準備の段階から交渉後の面倒見に至るまで，「人間という問題に十分な注意を払っているだろうか」と自分自身に問うのは，それだけの価値のあることなのだ。

［設問解説］

(1) 「あなたも予想不可能なのだ」

So＋be 動詞［または助動詞］＋Sで「Sもそうだ」の意（例：I was tired, and *so were the others*.「私は疲れていたし，他の者もそうだった」／I speak Italian, and *so does she*.「私はイタリア語を話すし，彼女もそうだ」）。問題文の場合，So が They have emotions, ... の部分を受けるとすれば，So *do* you. となるはず。So *are* you. となっている以上，So は unpredictable の部分だけを受けていると考える。

(2)

1. **Often they fail to interpret what you have to say**「しばしば，彼らはあなたが言うことを解釈しない［解釈できない］」

fail to－は「－しない，できない」の意（例：He *failed to* justify his assertion.（彼は主張が当たっていると説明できなかった）。what you have to say は構造上，You have to say *something*.→*what* you have to say ϕ という過程を経て作られたと考えることもできるが（その場合の意味は「あなたが言わなければならないこと」になる），交渉において絶えず何かを発言する義務があると考えるのは不自然。ここはむしろ，You have *something* to say.→*what* you have ϕ to say と考えるべきところ（この場合は単に what you say と書かれている場合とほぼ同義）。よって，「あなたの言うこと［言いたいこと］」などと処理するのがよい。

2. **in the way you intend**「あなたが意図するように」

interpret を修飾する副詞句。the way と you の間は関係副詞の省略（例：This is the way *he did it*.「これが彼がそれをした方法だ」→「それを彼はこのようにやった」）。

3. **and do not mean** ...「そして…を意味［意図］していない」

and は fail と do not mean をつないでいることに注意。また，解答例にもあるように「…を言っていない」と訳しても同じ内容を表すことができるので，それでもかまわない（例：I'm not clear about what he *means*.「彼の言っていることが［言わんとしていることが］よくわからない」）。

4. **what you understand them to say**「彼らが言っているとあなたが理解している［思っている］こと」
what は節の中で目的語として働くと同時に，全体を名詞節にまとめている関係代名詞。節内が you (S) understand (V) them (O) to say (C) と第5文型になっていることに注意。

(3)

1. **Failing to deal with others sensitively**「他の人たちを細心の注意を払って扱わないこと」
この Failing は動名詞で，文の主語。無生物主語なので，［全訳］のように「…を扱わないと」のように副詞的に処理してもよい。

2. **as human beings prone to human reactions**「人間らしい反応をしがちな［する傾向にある；よくする］人間として」
as … は deal を修飾する副詞句。prone は形容詞で後ろに「to＋名詞」もしくは「to不定詞」の形を取り，「ーする傾向がある」の意を表す（例：They are *prone to* illness.「彼らは病気にかかりやすい」／We are *prone to* make mistakes when we are tired.「疲れている時には間違いをしがちだ」）。問題文の場合は前に be 動詞がないことから，prone to … は前の human beings を修飾する形容詞句として働いていると考える。また，human reactions（人間的な反応）とは，ここでは，嫌なことをされて不快に感じたり，気分を害したりするような，人間によく見られる反応のこと。

3. **can be disastrous for a negotiation**「交渉にとって悲惨な結果を与え得る」
can be が文頭の Failing に対する動詞。

5

(1) エ （1点）
(2) エ （1点）
(3) same （2点）
(4) ウ （1点）
(5) エ （1点）
(6) ピーターが，自分と別れたことを少しも後悔していないように思えたこと。(34字) （4点）
(7) (7a) ウ (7b) ア (7c) エ (7d) カ （完答で1点）
(8) led to anything more permanent （2点）
(9) (2番目) someone (5番目) home （完答で2点）
(10) 突然彼の元から去っていくというアマンダの振る舞いは，彼にとって不当な仕打ちであるということ。(46字) （4点）
(11) エ （1点）

［出典］ Fiona Goble: *Things we never said*
（問題作成のためのやむを得ない事情から，省略・改変した箇所があります）

［全訳］

私たちが決して言わなかったこと

彼は後ろ姿を見ると，すぐに彼女だとわかった。彼は足を速めて彼女のすぐ前まで来たところで振り返ったが，にこりと笑うべきかどうか迷った。15年も経ったようには思えなかった。彼女には最初彼の姿が目に入っていなかった。ショーウィンドーをのぞいていたからだ。彼は彼女のジャケットの袖に触った。

「やあ，アマンダ」と彼は穏やかに言った。思い違いではないことはわかっていた。今度こそは確かだった。何年もの間，彼は彼女を見かけたと思ってばかりいた。バス停で，パブで，パーティーで。

「ピーター！」彼の名前を言うと，彼女の胸は鼓動を早めた。2人で過ごした初めての夏を彼女は覚えていた。クリブデンの川辺で一緒に寝転がった。2人とも18歳で，彼は頭を彼女のお腹の上にのせて，指先に草を絡ませて，君なしでは生きていけないよと彼女に告げたのだった。

「僕のことがわかるなんて驚きだな」と彼は言い，両手をコートのポケットに入れた。

「本当？」彼女は笑った。実は彼女も最近彼のことをしょっちゅう考えていた。「こっちへ戻って来たわけじゃないんでしょ」もちろん違うわ，と彼女は思った。彼がこの地をひどく嫌っていることを彼女は知っていた。まだ18の時でさえ，待ちきれずに飛び出して世界を旅したのだから。

「とんでもない」と彼は言った。「今でもロンドンにいるのさ」

彼女は彼を見た。彼は変わってないように見えた。自分が知っている男性たちのかくも多くのように，頭が禿げ始めてはいなかったが，肩幅は少し広くなり，顔はやや丸みを帯びていた。

「葬儀のために戻ってきたんだ」と彼は続けた。「父のだよ。心臓発作さ。まさに突然のことでね」

「お気の毒に」と彼女は言ったが，本当にそう思ったわけではなかった。彼が16歳になって背が高くなりすぎるまで，父にいつも殴られていたという話を彼から聞いたことを思い出したからだ。

「ありがとう」と彼は彼女に言ったが，死んだ父のことは何も感じず，ただ母のことで安心しただけだった。母は父がいない方が幸せだろう。もう何年も父と別れる勇気を奮い起こそうとしてきたのだから。

「それで君もここに戻って暮らしているわけではないんだね」

「私もロンドンにいるの」と彼女は言った。彼女は髪を両耳の後ろにかき上げたが，その仕草を彼は忘れていなかった。

「明日妹の結婚式に出るために戻ってきたのよ」

「それはよかったね」と彼は言ったが，彼が覚えているアマンダの妹は，かなり太った，退屈な12歳の子供ということだけだった。

「ええ」と彼女は同意したが，幼い妹の結婚によって，自分の恋愛の度重なる失敗が浮き彫りとなるだけだと感じていた。

「それでご両親は？」と彼は尋ねた。「お元気かい？」

「元気よ」外国の料理を食べて異国情緒溢れる休日を過ごす自分の中流階級の両親を，彼がいつも羨(うらや)んでいたことを彼女は思い出した。

「どこかへ急いで行くところかい」と彼は尋ねた。

「いいえ，ただ時間をつぶしているだけなの，本当に」

「じゃあ一緒につぶさないか。コーヒーでも飲もうよ」

彼らは大通りから少し入ったところにあるゲイビーという小さなカフェの方へ歩いて行った。初めて会った時，彼らはそこで笑い，テーブルの下で手をつなぎ，コーヒーを何杯も飲みながら自分たちの将来について語り合って，何時間も過ごしたものだった。2人は向き合って座った。彼はコーヒーを注文した。

彼女はインド，モロッコ，オーストラリアなど2人で訪れることを夢見ていた場所を思い出し，「それで，ピーター，あなたは海外特派員になったの？」と尋ねた。

「そういうわけじゃないんだ」と彼は言った。「驚くなかれ，僕は弁護士さ」彼の服装から，彼女はそれを信じることができた。それは彼が学生時分に着ていたお古のシャツとジーンズとは似ても似つかぬものだった。

「仕事は楽しい？」と彼女は尋ねた。

「うん」と彼は嘘をついた。「君は？ 世界的に有名な画家かい？」彼はいつも彼女の絵が大好きだった。彼の20歳の誕生日に彼女が描いてくれた自画像を彼は思い出した。彼は今でもそれを持っていた。

「それが…違うわ」彼女は笑おうとした。彼はまだ私の自画像を持っているかしらと彼女は思った。もう何年も前に彼女は絵をやめていた。ウェーブのかかった，肩まで垂れているまとまりにくい彼女の黒髪を彼は見た。今や少し白いものが混じっていたが，それでも彼女はとても美しかった。

「それじゃ」と彼は言った。「何をやっているんだい」

「たいしたことじゃないわ」と彼女は言った。「いくつかやってみたの」彼女はより永続するものへとつながるかもしれないと望みつつも，決してそうはならなかった一時的な仕事を転々としたことについて，彼に話したくはなかった。

「するともう絵は全然描いてないの？」

「ドアや壁を塗るだけよ」と彼女が冗談を言うと，彼はお義理で笑ってくれた。大学の最終学期に2人で借りた小さなアパートで過ごした夜のことを彼女は思い出した。彼は何時間も座って彼女が絵を描くのをただ眺めていた。彼女はスケッチブックを次から次へと絵で一杯にしていった。

「それであなたはロンドンのどこにいるの」と彼女は尋ねた。

「北の方だよ」と彼は言った。それはハムステッドにある寝室が3つついたアパートだった。質素で満足のいくところだった。彼は誰か自分の帰りを迎えてくれる人がいてくれたらと願ったすべての夜のことを思った。

「君は？」と彼は一呼吸置いてから尋ねた。

「南よ。悪くないわ，部屋を借りているの」彼女はクラパムのすたれた区域で借りた，壁がじめじめしている小さな部屋を思い浮かべた。「でもどこかに部屋を買おうかなと思っているの。それも帰ってきた理由の1つよ。少し身辺をすっきりさせたいの」と言って彼女はため息をつき，昔の寝室で見つけた彼からの手紙のことを考えていた。つい昨日読んでいたところだった。

「ねえ，ピーター，なぜあの日私は出て行ったのかわからないわ」と彼女はついに言った。彼は顔を上げて彼女を見た。

「いいんだよ」と彼は言いつつ，彼女がアパートに戻ってこなかった夜を思い出していた。

「僕たちは若かったんだ。若者はしょっちゅうそういったことをするものさ」と彼は付け加えたが，これは正しくないことを知っていた。そしてそのような仕打ちは不当だということも。彼は，彼女の両親の家に送ったすべての手紙のことを思い出した。最初は毎日書き，帰ってくるかせめて電話をしてくれと彼女に懇願した。そんな時でさえ，彼は彼女のような人には二度と会わないだろうということを知っていた。

「その通りだと思うわ」彼女は喉をごくりと鳴らし，

落胆を隠そうとし，彼が全く後悔していない様子だったことに傷ついた。

「さあ，そろそろ行かなくちゃ」と彼女は言った。

「こんなに早く？ ゆっくりする時間があるんだと思ったのに」

「あったのよ」と彼女は言うと，まばたきして涙を隠した。「でもそろそろ帰って結婚式の準備をしている母を手伝わないと」

「なるほど」と彼は言ったが，納得していなかった。もちろん彼女の両親ならわかるのだろうが。

「僕の電話番号を教えておこうか。会えるかもしれないから」

「かもね」と彼女は言った。

彼は電話番号をレシートの裏に書き，彼女はそれをハンドバッグのチャックの付いた仕切りの中に押し込んだ。

「ありがとう。さよなら，ピーター」

「さよなら，アマンダ」

その後何年経っても，彼女はまだ時折その仕切りを見ては，彼の番号がまだそこにあることを確かめている。

［設問解説］

(1) Not this time. の Not は，直前の He knew he hadn't made a mistake. の下線部を受けている。また，this time とは，次文（For years he kept thinking he'd seen her）に示されている「過去に何度も他人を彼女と見間違えた」ことを踏まえた表現である。したがって，「今度こそは（他人を彼女と見間違えるという）誤りを犯してはいない」という意味になる。そこでこの意味に最も近い**エ**が正解。

(2) 前文に She knew he loathed the place. とあることから，Peter は町を離れたがっていたと考えることができる。空所を含む文をこれに合う内容にするには，**エ**の wait を選ぶ必要がある。cannot wait to − で「−するのを待ちきれない」という意味になる。

アの hesitate は，couldn't と意味が合わない（didn't hesitate は誤りではないが，couldn't hesitate はおかしな意味である）。イの intend を選んでも，couldn't intend to −（−するつもりになれなかった）が，全く文脈に合わない意味となる。ウの restrain は，後に to 不定詞を従えることができない。

(3) 空所は the の後にあるので，名詞を入れると考えても，適切なものがない。そこで the を付けて用いる形容詞 **same** を思い出せるかどうかがポイントとなる。look the same は「自動詞＋補語」の形で「（以前と）同じに見える」という意味になる表現。こうすれば，後に続く He hadn't begun to go bald like so many of the men she knew, ... という文にも内容の上でうまくつながる。

(4) 各選択肢の意味は次の通り。

ア　彼が想像していたとおり

イ　彼女の単調で退屈な子供時代として

ウ　かなりぽっちゃりした退屈な12歳の子供として

エ　彼女よりもずっと魅力的な少女として

空所の前の部分は 'That's nice,' he said, though his only memory of Amanda's sister was となっていることから，Peter が Amanda の妹について覚えていた唯一の姿を描写したものとして**ウ**が，形・内容ともに最適である（この as は前置詞で，12-year-old は「12歳児」という「人」を表す名詞表現であることに注意）。

イのように，後に childhood のような「人」以外の名詞が来るのは，この文脈では不適切である。なお，「…子供時代には」という意味の表現は，in ... childhood である。アは前の his only memory ... was と意味がうまくつながらない。エは charming が，前の 'That's nice,' he said, though の後に来るべき意味として不適切である。

(5) 正解は**エ**の served。serve to − は「〈物事が〉−する役目を果たす」という意味。（例）Your comments *only serve to* complicate the problem.（あなたの発言はその問題を複雑にするだけだ／only と共に用いられていることにも注意）

アの added は「add to＋名詞」という形では「名詞を増やす」という意味になるが，「add to＋不定詞」という形では意味不明である。イの agreed（同意した）やウの decided（決定した）は，意味が文脈に合わない。

(6) 下線部(6 a)と(6 b)の間で，Amanda の Peter に対する気持ちが大きく変化する場面を探すと，空所(9)と下線部(10)の間で，Amanda は Peter に 'Oh, Peter, I don't know why I left that day,' と告白する。それに続く Peter の 'It's all right,' や 'We were young. Young people do things like that all the time,' という言葉を聞き，Amanda は 'I suppose you're right.' と述べるが，その後すぐに 'Well, I ought to be going,' と切り出す。つまり，彼女の Peter に対する気持ちが大きく変化するきっかけとなったのは，上記の下線部の言葉にあると考えられ

る。なぜこれらの言葉が彼女の気持ちを大きく変えたのかと言えば，その鍵は 'I suppose you're right.' というセリフの直後に書かれている She swallowed hard, trying to hide her disappointment and hurt that he seemed to have no regrets. という文の下線部にある（この文の hurt は過去分詞で，分詞構文を導いている）。そこで，この下線部の内容を指定字数以内にまとめればよい。

(7) (7 a)は 'And so, Peter, did you become a foreign correspondent?' という Amanda の問いかけへの応答として適切な表現を選ぶ。次の文に 'I'm a lawyer, believe it or not.' とあることから，空所には No の意味にほぼ等しいものを選ぶ。選択肢の中ではウの Not exactly（そういうわけではない；少し違う）が最適である。

(7 b)は 'You enjoy it?' という Amanda の問いかけへの応答としてアの Yes が最適である。イの I surely did は，動詞が過去形であるのが不自然である。ウの Not exactly は(7 a)に入れざるをえないので，ここでは使えない。

(7 c)は 'What are you up to?'（何やっているの）という問いかけへの返答として，エの Nothing much（たいしたことはやってない）がふさわしい。

(7 d)は 'So you're not painting at all?' という問いへの返答であるが，直後に she joked とあることに注意したい。カの Only doors and walls（ドアや壁だけよ）を選べば，これは paint に「絵を描く」と「ペンキを塗る」の2つの意味があることに引っかけた冗談と解することができる。オの Dead things only（死んだものだけ）では，何が冗談かがわからないので不適切である。

(8) 正解は **led to anything more permanent**。下線部の had の主語は，関係代名詞の that である（この that は，might lead の主語としても働いている）。had は過去完了形の代用で，この後には前の lead to something more permanent に相当する内容が省略されていると考えるのが最適である。ただし had の後なので lead は過去分詞形（led）になり，never の後なので something は anything に変えるのが適切である。

(9) 正しく並べた語順は **had someone to come home to** となる。had は（wished の目的語の節内なので）仮定法過去形である。were では後がうまく続かないので，これは不要となる。had の目的語に someone を置き，これを修飾する形容詞用法の to 不定詞を作ればよい。この場合，to 不定詞の形は，to come home to として，someone が末尾の前置詞 to の意味上の目的語となる関係にするのが適切である。someone to come home to で「帰っていくことのできる人（自分の帰りを迎えてくれる人）」という意味になる。(**類例**) She had nobody *to talk to*.（彼女には話し相手がいなかった）／It's so good to have a house *to come home to* after a hard day's work.（1日懸命に働いた後で，帰ることのできる家があるのは本当にありがたいことだ）

(10) 下線部自体の意味は，「彼はそのような扱いを受けるに値しなかった」という意味である。such treatment（そのような扱い）とは，'Oh, Peter, I don't know why I left that day,' という Amanda のセリフや，'It's all right,' he said, remembering the evening she hadn't come back to the bedsit. という Peter の回想の内容から読み取れるように，「Amanda が突然 Peter の元を去っていった」ことを指している。hadn't deserved とは「そのようなひどい扱いを受けるに値しなかった（そのような不当な扱いを受けた）」という意味に解するのが正しい。〈**参考**〉What did I do *to deserve such treatment*?（このような［ひどい］仕打ちを受けるなんて，私が何をしたというのか）

(11) 本文第1段落第3文に，It didn't seem like fifteen years.（15年には思えなかった）とある。これは Amanda と Peter が別れてから再会するまでの年数を表していると考えられる。また，下線部(1)の後の 'Peter!' で始まる段落中に They were both 18 ... とあることから，2人の年齢はほぼ同じであることがわかる。さらに，空所(7 b)を含む段落中に，He remembered the portrait of herself which she'd painted for him for his twentieth birthday. とあるので，2人が別れたのは少なくとも20歳の時以降であることになる。したがって，Amanda の現在の年齢は（20 + 15 =）35歳以上であることになるので，選択肢中で正しいと考えられるのは，エの37歳のみである。